

837

水鳥の川わかれては夕日さす

羽公

羽公自身によれば「引佐細江に架かつて
いる落合橋のところで、都田川と井伊谷川
が合流した夕暮れの風景」です。金色に染
まる川面に水鳥のシルエツトが浮かびます。

この句を誌名の由来とした、羽公を師と
する井村経郷主宰の俳誌『水鳥』の100号
記念として建立しました。境内には他に主
宰者の碑、「水鳥の会」138人の円柱集合碑、
本堂には同会の奉納俳額があります。



季語 水鳥 (冬)
場所 北区三ヶ日町大崎
宝珠寺
建立 平成 19 年

百合山 羽公 (1904 - 1991) 中区伝馬町の人。浜松商業高校卒業。
最初『ホトトギス』に投句。のち秋桜子主宰の『馬酔木』同人。相生垣
瓜人と『海坂』を主宰。昭和 49 年第八回蛇笏賞受賞。

852

水無月の落葉とぎめず神います

秋桜子

「水無月の落葉は楠・榿・椎など降りしき
るように落ち、いくら掃いてもきりがな
いのです。が、さすがは神社の境内。玉砂利の
上には一枚の落葉もありません。その清々し
さの中に神々を見出しました」というのです。

『馬酔木』主宰の俳人であり、宮内庁の侍
医という顔ももつ秋桜子の、昭和48年、再
興された井伊谷宮を参拝した折の即吟です。
当地の俳誌『海坂』は秋桜子の系譜です。



季語 水無月 (夏)
場所 北区引佐町井伊谷
井伊谷宮
建立 昭和 61 年

水原 秋桜子 (1892 - 1981) 東京の人。本名・豊。宮内庁医師。最初『ホ
トトギス』、のち『馬酔木』を創刊・主宰。相生垣瓜人、百合山羽公は秋
桜子の門。

あ行
か行
さ行
た行
な行
は行
ま行
や行
ら行
わ行

867

むらまつ
村松やみどり立つ中に不二の山

ちようむ
蝶夢

京の蝶夢が晩春の臨江寺に逗留した時の句。「雨上がりの朝、対岸の三つ山の松の新緑の向こうに、雪をいただいた富士が鮮やかに見えている」というのです。佐鳴八景として当時は風光明媚なところでした。碑は入野の竹村方壺や蓮華寺の鳥居柳なども門人の建立で「みどり塚」とよばれていました。山門前の碑が当時のもの、境内には昭和30年に再建された碑があります。



季語 みどり立つ (春)
場所 西区入野町
臨江寺
建立 寛政 8(1797) 年

五升庵 蝶夢 (1732 - 1795) 京の生まれ。芭蕉の顕彰と蕉風復興に尽力。浜松に蝶夢門の一大俳壇を築いた。臨江寺逗留時に浜名湖を巡航した折の『遠江記』がある。

870

めいげつ
名月にふもとの霧や田の曇

ばせを

「見渡すと、向こうの山の麓から霧が流れ出て、田の面がうつすらと曇っている。それが満月の光りに照らされて、静かな夜の景色である」というのです。河岸段丘の境内から眺めた趣は、句のとおりだったのでしよう。蕉門俳諧を伝える佳菊庵という結社の人たちが、句意に適う場所として、この碑を建てました。揮毫は地元の蕉門俳人・佳菊庵一世・久米甘谷です。



季語 名月 (秋)
場所 東区半田山一丁目
六所神社
建立 明治 36 年

松尾 芭蕉 (1644 - 1694) 伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

884

ものいへば唇寒し秋の風

芭蕉翁
ばしゅうおう

前書に「人の短をいふことなかれ、己の長を説くことなかれ」とあります。漢書『文選』の「無道人之短、無説己之長」が出典です。句意は「人中でものを言えば、折からの秋風が唇にしみるように、心に悔やまれることが少くない」というのです。選句にあたっては、俳諧を通して二宮尊徳の報徳を広めたいとした、松島十湖や大木随處の思想が色濃く反映されています。



季語 秋の風 (秋)
場所 東区豊西町
十湖百句塚
建立 明治39年

松尾 芭蕉 (1644 - 1694) 伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

905

山鳥の尾をふり出しぬ初時雨

晴虹
せいこう

「山鳥の長い尾が、突然降り出した時雨にあたって、驚いたように振れているよ」というのです。速やかな季節の到来に対する驚きを、時雨が「降る」と尾を「振る」に掛け、機知に富んだ句に仕上げています。山門の晴虹を囲む11基の碑は、境内の初代佳菊庵久米甘谷の碑とともに、この地に蕉風俳諧結社・佳菊庵があつたことを伝える記念になっています。



季語 初時雨 (冬)
場所 東区半田山四丁目
松岳院
建立 昭和9年

森 晴虹 (1875 - 1933) 浜松市半田町の人。本名・兼松。別号・三省庵、佳菊庵 (三世)。嗣子は森月鼠。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

908

やま つき
山の月ころも高う眺めけり

たこ なか
はくどうじじつこ
白童子十湖

「ころも高う」が眼目で、「山の頂に静かに昇る月を眺めていると、心が洗われ、澄み切った思いがしてくることだ」というのです。

十湖得意の句で、静岡市清水寺（明治36年）、文京区十善戒寺（大正3年）、菊川町応声教院（大正5年）、和歌山県高野山（大正14年）と県内外に建てられています。「今芭蕉」といわれた十湖の俳諧行脚の広がり、門人の分布のほどが知られます。



季語 月（秋）
場所 浜北区平口
不動寺
建立 大正13年

松島 十湖（1849 - 1926）遠江を代表する旧派の宗匠。夷白、嵐牛、春湖に師事。俳諧と報徳の融合を図り、教訓的性格の句を特色とする。百人一句塚の主宰者。門人と句碑は全国に分布。

915

ひかり きよう つき
や、あつてはなつ光や今日の月

りゅうえんせい か
柳園成佳

初秋は日没も遅く、月は昇つていても光は微かです。陽が沈むと次第に輝きを増し、やがて空は月星の世界となります。太陽と月とが交錯する推移を詠んだ句です。

最初は海岸近くの松の根元に建っていました。見事な枝振りの古松と碑と引佐細江湖、それは一幅の絵を思わせました。拡張工事で倒壊、久しく放置されていましたが、移築が繰り返され、現在の場所に落ち着きました。



季語 今日の月（秋）
場所 北区細江町気賀
向山海岸
建立 大正8年

名倉 成佳（1840 - 1916）北区細江町五味の人。本名・六治。号・柳園。和歌的教養を備えた気賀俳壇の指導者。十湖門・西遠吟社。

あ
か
さ
た
な
は
ま
や
ら
わ
行
行
行
行
行
行
行
行

921 夕蝉ゆうせみのふるさとつに着くるく俣まかな

濱人ひんじん



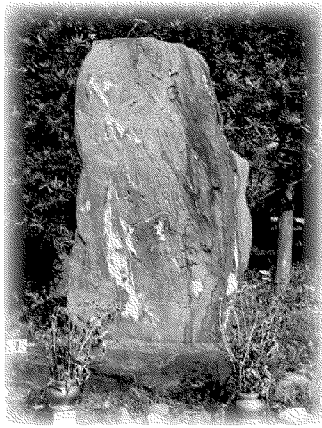
季語 夕蝉 (秋)
場所 北区三方原町
三方原墓園
建立 昭和 47 年

夕蝉とは秋の夕暮れに鳴くひぐらし。この句は
帰郷時の吟です。「長く故郷を離れていた
が、今日、我が家に帰って来た。門前で俣くるま
を降りると蝉が迎えてくれた」というので
す。鮭が故郷の川に戻るように、人もふる
さとを目指します。故郷は温かい。濱人
のふるさと原島には「浜人通り」と名付
けられた道があります。墓園もまた故郷、
妻と長男と三人で静かに眠っています。

原田 濱人 (1884 - 1972) 浜松の生まれ。本名・八郎。最初『ホトギス』
に投句、高浜虚子に師事。後に『ホトギス』を去り、昭和 14 年『みづうみ』
を創刊・主宰。

959 餘よほど来たきやうでもあさはなし花なかの中

夷白いはく



季語 花 (春)
場所 東区大瀬町
清岩寺
建立 明治2年

「花の名所を訪れて、随分歩いた気がしてい
るのに、まだほんの入り口に過ぎなかつたのだ」
というのです。花の名所を蕉風の譬たとえとすれば、
俳諧の奥深さを前にした自省の句と解せます。
夷白は近隣の子弟のために私塾を開いた篤
志家しかで、俳諧・和漢・書画に優れていました。
没後門人(筆子)たちは報恩のため菩提寺ぼだいじに
この碑を建てました。碑面は俳友の有賀烏玉の
揮毫きごうです。

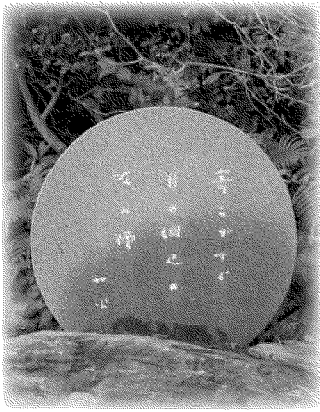
榎木 夷白 (1797 - 1868) 東区大瀬町の人。本名・利長、要右衛門。
別号・朝日庵、年立庵。松島十湖の師。嗣子要一郎は俳人の夷白

964

寄らですぐ月の湖辺の友の僧

林火

「今夜の月を一緒に見ようと楽しみに待っていたのに、素通りして帰ってしまったよ。浜名湖畔の寺の僧は」というのです。非難しているではありません。月に心を奪われ、立ち寄ることさえ忘れた、そんなとらわれない自由さを、心から羨ましく思っているのです。この友とは、現在の本興寺住職の止観院金原日達老師。当時は新居町の本果寺住職でした。



季語 月 (秋)
場所 湖西市新居町新居
本果寺
建立 平成6年

大野 林火 (1904 - 1982) 神奈川県の人。本名・正、昭和 21 年『濱』を創刊・主宰。昭和 44 年第三回蛇笏賞受賞。俳人協会会長。

974

六地藏さんぽかぽか陽がさした

山頭火

山頭火が西来院を訪れたのは、昭和14年4月28日の午前でした。ちょうど遠足で来ていた幼稚園児が、藤棚の下で早めのお弁当を広げていました。邪気のない賑やかな声と様子は、山頭火を癒してくれたに違いありません。六地藏は山門を入ったすぐ左側にあります。この句は、帰る時に見た六地藏です。来た時と違った洗われた心で寺を出る山頭火の姿が浮かびます。



季語 無季
場所 中区広沢二丁目
西来院
建立 平成 17 年

種田 山頭火 (1882 - 1940) 山口県生まれ。本名・正一。別号・田螺公。『層雲』同人。自然を愛し旅と酒と句作に生きた。浜松来訪は二度。特に鴨江町在住の細谷野路が心のこもったもてなしをした。

わが眼の前をよぎる蟹をれぞれの鉄のあかく

加藤雪腸

「小さな蟹が何匹も目の前を横切つて行く。それぞれの鉄が赤く、何と可憐なことだ」というのです。夏の弁天島での体験です。

雪腸が近代俳句を志したのは、静岡師範の学生の時、子規の『俳諧大要』に触発されて、子規に手紙を書き、丁寧な返事をもらったことがきっかけでした。以来、ひたすら俳句革新の道を突き進み、志半ばに交通事故で亡くなりました。



季語 蟹 (夏)
場所 西区舞阪町弁天島
渚園
建立 昭和 57 年

加藤 雪腸 (1875 - 1932) 榛原郡細江村の生まれ。本名・孫平、号・千里坊。本県の俳句革新運動の先駆者。定型から自由律に移り、曠野社を創設、『曠野』を刊行。

別る、は又逢ふはしよ月の友

十湖

「お別れしますが、これがまた再会の契機ともなりましょう。皆さん、さようなら」というのです。6年間の引佐麓玉郡長の任が果て、帰郷する時の挨拶吟。大勢の人々が曲がり松まで見送ってくれました。「月の友」は慣れ親しんだ俳諧の友とも、再び巡つて来る満月のように変わらぬ懐かしい友とも解せませす。碑に残る傷は三方原用水の工事で破損、修復された跡です。



季語 月の友 (秋)
場所 北区細江町中川
姫街道沿
建立 明治 19 年

松島 十湖 (1849 - 1926) 遠江を代表する旧派の宗匠。夷白、嵐牛、春湖に師事。俳諧と報徳の融合を図り、教訓的性格の句を特色とする。百人一句塚の主宰者。門人と句碑は全国に分布。

あ行 か行 さ行 た行 な行

は行 ま行 や行 ら行 わ行